

☆復活節第4主日(4月30日)の聖書朗読☆ 任司祭からの解説があります。

第一朗読 (使徒たちの宣教 2章 14a, 36~41 節)

五旬際の日、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話した。「イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」

ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めていた。ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。

第二朗読 (使徒ペトロの手紙 I 2章 20b~25 節)

愛する皆さん、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。

「この方は、罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった。」ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。

福音朗読 (ヨハネによる福音書 10章 1~10節)

そのとき、イエスは言われた。「はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いである。門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているのので、ついて行く。しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。の者たちの声を知らないからである。」イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。

イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

いよいよ五月の連休が始まります。コロナ禍で待ちに待った連休ですので、よい休みになると良いですね。教会ではこの五月はマリア様に捧げられた月になっています。自然の美しさがそうさせるのでしょうか。サレジオ会では五月二十四日が「キリスト信者の助けなる聖マリア」というちょっと長い名前の祝日になっています。ドン・ボスコが大切にしていたマリア様の名前です。ドン・ボスコはその事業を始めるときにいつも「さあマリア様一緒に始めましょう」と言って始めていたそうです。このマリア様のご像は教会の階段のところにあって皆さんが良く立ち止まって祈っていますね。サレジオ幼稚園ではこの日にマリア祭を行うことになっています。

さて今日の主日は「善き牧者の主日」と言われて、神の民を守り救いに導くイエスの姿が強調されています。また今日は「世界召命祈願の日」に定められています。神の民のために働く多くの人の召し出しを祈る日なのです。心を合わせて祈りましょう

第一朗読（使徒たちの宣教 2章14a、36～41節）

聖霊に満たされたペトロは声を張り上げて語ります。イエスの復活以前には見られなかったペトロの力強い姿がここにあります。それに対し心打たれた人々は「私たちはどうしたらよいのですか」と尋ねます。ペトロは答えて「悔い改めなさい」。この悔い改めはどうすることが悔い改めになるかをペトロは語っています。「イエスの名によって洗礼を受けること」そして「罪を許していただくこと」そして「賜物としての聖霊を受けること」ですと。これらの要素は今の私たちにとっては「洗礼」、「ゆるしの秘跡」、「堅信」に繋がっています。そして続けます。「これらの物は主である神が招いてくださるものなら、誰にでも与えられる」と述べています。もはや神の救いの業はイスラエルだけにとどまらないのです。

第二朗読（ペトロの手紙Ⅰ 2章20a～25節）

私たちが罪に死んで、義によって生きるために「イエスは苦しみを受け、耐え忍ばれた」とペトロは語ります。イエスを裏切ったペトロのこの言葉には重みがあります。イエスが十字架に付けられて死んでしまったという事実がペトロにそう言わせているのです。でも、私たちの魂の牧者のところにあなたたちは戻ってきたとも述べています。ペトロもそうでした。ペトロも戻ってきたのです。わたしたちもよい羊飼い、牧者の元に戻りましょう。

福音朗読（ヨハネによる福音書 10章1～10節）

ヨハネはしきりに羊とその羊飼いとの関係について論じています。羊飼いは一匹一匹の名を呼んでよい牧草のある草原に連れ出すのです。また、羊たちを守るためにいつも声を掛けて導くと。羊たちを襲う獣や強盗たちから守るために良い羊飼いは警戒を怠らない。これらの話は何を物語っているのでしょうか。おそらくヨハネが福音を書き著した当時、キリスト信者を惑わす教えや人たちがいたために、イエスの教えに忠実であるように、イエスの守るその牧場にとどまるようにと考えていたのではないかと思います。イエスは自分に従う羊たちのために命さえも捧げられたからです。



青々とした牧草？（2022年夏・尾瀬ヶ原）

P.S.

マスクを外して生活するのは久しぶりですね。何より皆の笑顔が見れるのが良いです。「こんな顔してたっけ？」。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光